

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.11 November 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
文化的故郷と精神的故郷
／井上 昭洋 1
- 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(8)
本連載における「翻訳」について⑦
／加藤 匡人 2
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (16)
戦前台湾における現地人布教師の養成
／山西 弘朗 3
- ◁ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (11)
社会的養護における天理教の社会福祉活動 (1)
／深谷 弘和 4
- イスラームから見た世界 (26)
イスラームの宗教教育④—教えを学ぶこと、信仰を深めること—
／澤井 真 5
- コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (30)
7. コロンビアの非日常1：お祭りの話 その2
／清水 直太郎 6
- 天理参考館から (33)
源氏物語にまつわる一考察—高貴な女性の行為の結末—
／幡鎌 真理 7
- おやさと研究所ニュース 8

2023年豪州日本研究学会研究大会 / 国際繫生語大会で発表 / 日本宗教学会第82回学術大会で発表 / 第360回研究報告会「天理教教祖による宗教革新と教団形成」(9月11日)

巻頭言

文化的故郷と精神的故郷

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

とある先生から「全世界を異郷の地とするものが完璧だと書いてあったけれど、これはユダヤ民族のことを想定しているのだろうか？ それはともかく、そもそもおぢばは人類の故郷なのではないか？」という質問を受けた。8月号の巻頭言「全世界を異郷の地とするもの」を読んだので質問である。

1つ目の質問に対する答えはノーだ。これは、1948年のイスラエル建国まで国土を持たなかった流浪の民としてのユダヤ民族のイメージから出た質問だと思われる。国土を持たない流浪の民にとって、全世界が異郷の地であっただろうということだ。しかし、一人ひとりのユダヤ人にとって、北米であれ、欧州であれ、生まれ育った土地があったわけで、ここで言う「異郷の地とする」とは、そのような生まれ育った故郷でさえ異郷の地とするという意味である。

2つ目の質問に対する答えは、字句通りに解せば、「天理教の教えにおいて」という条件のもとイエスになる。もちろん、ここで問われているのはそのようなことではないので、少し言葉を足さねばならないだろう。聞いたかったのは、全世界を異郷の地とする完璧な者にとって、人類の故郷とされるおぢばでさえも異郷の地になってしまうのか？ということだと思われる。

この問いについては、問いの設定の仕方に問題があると言って良いかもしれない。1つ目の質問にも関わってくるのだが、2つ目の質問では2つの異なる故郷を混同もしくは同一視して問いを立ててしまっているのである。ここでサイドが引用したフーゴーの行を再度、記してみる。

故郷を甘美に思うものは未だひ弱な初心者だ。あらゆる土地を故郷とするものは既に力強い。だが、全世界を異郷の地とするものは完璧である [拙訳]。

ここでフーゴーの想定している故郷とは、文字通り自分の生まれ育った故郷であり、サイドが「文化的故郷 (cultural home)」と呼んだものである。通常私たちはこの意味で「故郷 (こきょう・ふるさと)」という言葉を用いる。

一方、「おぢばは人類の故郷」と言う時の故郷は、その人が生まれ育った故郷である必要はない。おぢばは人類が宿し込まれた場所と教えられるので、比喩的に「人類の故郷」と呼ぶのだ。よって、この故郷は文化的故郷ではなく、「精神的故郷 (spiritual home)」と呼ぶべきものである。そして、それは濃厚な物語や記憶が埋め込められた聖地なのだ。

例えば、ゴレ島の「奴隷の家」を初めて訪れるアフリカ系アメリカ人が「帰ってきたのだ」と感じるのは、その場所に自分たちの祖先の物語や記憶が埋め込まれていると感じるからだ。おぢばも「元の理」の物語が埋め込まれているからこそ、信仰者にとっての精神的故郷、聖地となる。そして、その場所は、住んだことはおろか訪れたことさえなくても「帰る」ことのできる場所でもある。

フーゴーは、全世界を異郷の地とするものこそが完璧であるとした。サイドは、自らの文化的故郷でさえも異化して眺めることの重要性を説いた。では、精神的故郷としてのおぢばについてはどのような態度の信仰者が完璧であると考えられるのだろうか。私は、おぢばに帰らなくても“おぢば帰り”のできる人、どこにいても“おぢば帰り”ができて人こそが完璧だと思う。フーゴーのレトリックを借りれば、全世界を精神的故郷、ぢばとするものこそが完璧であると考えている。どこにいても「ぢば」を思い、親神と対峙し、世界は神の身体であることを感じるのだが、ぢばについて求められる完璧な姿なのかもしれない。